

神国王御書

弘安元年 五七歳

夫^{それおもんみ}以^{みずほ}れば日本国を亦水穂の国と云ひ、亦野馬台^{やまと}、又秋津島^{あきつしま}、又扶桑等^{ふそう}云云。六十六国・二島、已上六十八箇国。東西三千余里、南北は不定なり。此の国に五畿七道あり。五畿と申すは山城・大和・河内・和泉・摂津等なり。七道と申すは東海道十五箇国・東山道八箇国・北陸道七箇国・山陰道八箇国・山陽道^八 箇国・南海道六箇国、西海道十一箇国、亦鎮西と云ひ、又太宰府^{ちんせい}云云。已上此は国なり。

国主をたづめれば神世十二代、天神七代地神五代なり。天神七代の第一は国常立^{くにとこたちのみこと} 尊、乃至第七は伊奘諾^{いざなぎのみこと} 尊^{男なり}、伊奘册^{いざなみのみこと} 尊^{妻なり} 地神五代の第一は天照大神、伊勢大神宮日の神是なり。乃^{いざなぎ・いざな}至第五は彦波瀲武鸕鷀草葺不合^{ひこなぎさたけうの はふきあえずのみこと} 尊^{此の神は第四のひこほの御子なり。母は竜女なり。} 已上地神五代。已上十二代は神世なり。人王は大体百代なるべきか。其の第一の王は神武天皇、此は彦波瀲^{ひこなぎさ}の御子なり。乃至第十四は仲哀^{ちゅうあい}天皇^{八幡御父なり}、第十五は神功^{じんくう}皇后^{八幡御母なり}、第十六は応神^{おうじん}天皇、仲哀と神功の御子にして今の八幡大菩薩なり。乃至第二十九代は宣化^{せんか}天皇なり。此の時までは月氏漢土には仏法ありしかども、日本国にはいまだわたらず。

第三十代は欽明天皇、此の皇は第廿七代の継体の御嫡^{けいたい}子^{ちやくし}なり。治卅二年、此の皇の治十三年^{壬申}十月十三日^{辛酉}、百济^{くだら}国の聖明^{せいめい}皇^{おう}、^{金銅}の釈迦^{けいたい}仏^{ちやくし}を渡し奉る。今日本国の上下万人一同に阿弥陀^{これ}仏と申す此なり。其の表文に云はく「臣聞く、万法の中には仏法最も善し、世間の道にも仏法最も上なり。天皇陛下亦^{まさ}応に修行あるべし。故に敬って仏像・経教・法師^{ささ}を捧^{ささ}げて使^{こうけん}ひに附して貢獻す。宣しく信行あるべき者なり」^{已上}。然りといへども欽明・敏達^{びたつ}・用明^{ようめい}の三代三十余年は崇め給ふ事なし。其の間の事さまざまなりといへども、其の時の天変地天は今の代にこそにて候へども、今は亦其の代にはにるべくもなき変天なり。第卅三代崇峻^{ちよう}天皇^似の御宇より仏法我が朝に崇められて、第卅四代推古^{すしゆん}天皇^{ぎよう}の御宇に盛んにひろまり給ひき。此の時三論^{さんろんしゆう}宗^{じようじつしゆう}と成実^{さんろんしゆう}宗^{じようじつしゆう}と申す宗始めて渡りて候ひき。此の三論宗は月氏にても漢土にても日本にても大乘の宗の始めなり。故に宗の母とも、宗の父とも申す。人王三十六代に皇極^{こうぎよく}天皇の御宇に禅宗わたる。人王四十代天武^{てんむ}の御宇に法相^{ほっそうしゆう}宗^{げんしゆう}わたる。人王四十四代元正^{げんしゆう}天皇の御宇に大日経わたる。人王四十五代に聖武^{しょうむ}天皇の御宇に華嚴^{りっしゆう}宗^{りっしゆう}を弘通せさせ給ふ。人王四十六代孝謙^{りっしゆう}天皇の御宇に律^{りっしゆう}宗^{りっしゆう}と法華^{りっしゆう}宗^{りっしゆう}わたる。然^然かりといへども、唯律^{ばか}宗^{ばか}計^{ばか}りを弘めて、天台法華^{ばか}宗^{ばか}は弘通なし。

人王第五十代に最澄^{さいちよう}と申す聖人あり。法華^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}を我と見出だして、俱舍^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・成実^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・律^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・法相^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・三論^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・華嚴^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}等の六宗をせめをとし給ふのみならず、漢土に大日^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}と申す宗有りとしるしめせり。同じき御宇に漢土にわたりて四宗をならいわたし給ふ。所謂法華^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・真言^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・禅^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}・大乘^{くしゃしゆう}の律^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}なり。しかりといへども法華^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}と律^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}とをば弘通^{くしゃしゆう}ありて禅^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}をば弘め給はず。真言^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}をば宗^{くしゃしゆう}の字^{くしゃしゆう}をけつ^{くしゃしゆう}り、たゞ七^{くしゃしゆう}大^{くしゃしゆう}寺^{くしゃしゆう}等の諸^{くしゃしゆう}僧^{くしゃしゆう}に灌^{くしゃしゆう}頂^{くしゃしゆう}を許し給ふ。然れども世間の人々はいかなる故という事をしらず。当時の人々の云はく、此の人は漢土にて法華^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}をば委^{くしゃしゆう}細^{くしゃしゆう}にならいて、真言^{くしゃしゆう}宗^{くしゃしゆう}をばく^{くしゃしゆう}はしく知^{くしゃしゆう}ろし食^{くしゃしゆう}さざりける

かとすいし申すなり。

同じき御宇に空海と申す人漢土にわたりて真言宗をならう。しかりといへどもいまだ此の御代には帰朝なし。人王第五十一代に平城天皇の御宇に帰朝あり。五十二代嵯峨の天皇の御宇に弘仁十四年正月十九日に、真言宗の住処東寺を給ひて護国教王院とがうす。伝教大師御入滅の一年の後なり。

人王五十四代仁明天皇の御宇に円仁和尚漢土にわたりて、重ねて法華真言の二宗をならいわたす。人王五十五代文徳天皇の御宇に仁寿と齋衡とに、金剛頂経の疏、蘇悉地経の疏已上十四巻を造りて、大日経の義釈に並べて真言宗の三部とがうし、比叡山の内に総持院を建立し、真言宗を弘通する事此の時なり。叡山に真言宗を許されしかば、座主両方を兼ねたり。しかれども法華宗をば月のごとく、真言宗をば日のごとくといへしかば、諸人等は真言宗はすこし勝れたりとを思ひけり。しかれども座主は両方を兼ねて兼学し給ひけり。大衆も又かくのごとし。

同じき御宇に円珍和尚と申す人御入唐、漢土にして法華・真言の両宗をならう。同じき御代に天安二年に帰朝。此の人は本朝にしては叡山第一の座主義真・第二の座主円澄・別当光定・第三の座主円仁等に法華・真言の両宗をならいきわめ給ふのみならず、又東寺の真言をも習ひ給へり。其の後に漢土にわたりて法華・真言の両宗をみがき給ふ。今の三井寺の法華・真言の元祖智証大師此なり。已上四大師なり。

総じて日本国には真言宗に又八家あり。東寺に五家、弘法大師を本とす。天台に三家、慈覚大師を本とす。人王八十一代をば安徳天皇と申す。父は高倉院の長子、母は太政入道の女建礼門院なり。此の王は元暦元年三月廿四日八島にして海中に崩じ給ひき。此の王は源頼朝將軍にせめられて海中のいろくづの食となり給ふ。人王八十二代は隠岐法皇と申す。高倉の第三王子、文治元年御即位。八十三代には阿波院、隠岐法皇の長子、建仁二年に位に継ぎ給ふ。八十四代には佐渡院、隠岐法皇の第二王子、承久三年二月廿六日に王位につき給ひ、同じき七月に佐渡のしまへうつされ給ふ。此の二・三・四の三王は父子なり。鎌倉の右大将の家人義時にせめられさせ給へるなり。

此に日蓮大いに疑って云はく、仏と申すは三界の国主、大梵王・第六天の魔王・帝釈・日月・四天・転輪聖王・諸王の師なり、主なり、親なり。三界の諸王は皆此の釈迦仏より分かち給ひて、諸国の総領・別領等の主となし給へり。故に梵釈等は此の仏を或は木像、或は画像等にあがめ給ふ。須臾も相背かば梵王の高台もくづれ、帝釈の喜見もやぶれ、輪王もかほり落ち給ふべし。神と申すは又国々の国主等の崩去し給へるを生身のごとくあがめ給う。此又国王・国人のための父母なり、主君なり、師匠なり。片時もそむかば国安穩なるべからず。此を崇むれば国は三災を消し七難を払ひ、人は病なく長寿を持ち、後生には人天と三乗と仏となり給ふべし。

しかるに我が日本国は一閻浮提の内、月氏漢土にもすぐれ、八万の国にも超えたる国ぞかし。其の故は月氏の仏法は西域等に載せられて候、但七十余箇国なり。其の余は皆

外道の国なり。漢土の寺は十万八千四十所なり。我が朝の山寺は十七万一千三十七所。此の国は月氏漢土に対すれば、日本国に伊豆の大島を対せるがごとし。寺をか^数ずうれば漢土月氏にも雲泥に^過すぎたり。かれは又大乗の国・小乗の国、大乘も権大乘の国なり。此は寺ごとに八宗十宗をならい、家々宅々に大乘を讀誦す。彼の月氏漢土等は仏法を用ゆる人は千人に一人なり。此の日本国は外道一人もなし。其の上神は又第一天照太神・第二八幡大菩薩・第三は山王等三千余社、昼夜に我が国をまぼり、朝夕に国家を見そなわし給ふ。其の上天照太神は内侍所^{ないしどころ}と申す明鏡^影にかけをうかべ、内裏^{だいり}にあがめられ給ひ、八幡大菩薩は宝殿をすて、主上の頂^{すみか}を栖とし給ふと申す。仏の加護と申し、神の守護と申し、いかなれば彼の安徳と隱岐と阿波・佐渡等の王は相伝の所従等にせめられて、或は殺され、或は島に放たれ、或は鬼となり、或は大地獄には墮ち給ひしぞ。日本国の叡山・七寺・東寺・園城等の十七万一千三十七所の山々寺々に、いさゝかの御仏事を行なふには皆天長地久・玉体安穩とこそいのり給ひ候へ。其の上八幡大菩薩は殊に天王守護の大願あり。人王第四十八代に高野天皇の玉体に入り給ひて云はく、我が国家開闢^{かいびやく}以来臣を以て君と為すこと未だ有らざる事なり。天之日嗣^{あまのひつぎ}は必ず皇緒^{こうしよ}を立つ等云云。又大神^{ぎょうきょう}・行教に付して云はく、我に百王守護の誓ひ有り等云云。

されば神武天皇より已来百王にいたるまではいかなる事有りとも玉体はつゝ^恙があるべからず、王位を傾くる者も有るべからず、一生補^ふ処^{しょ}の菩薩は中天なし、聖人は横死せずと申す。いかにとして彼々の四王は王位を^追を^落いとされ、国を^奪うばわるゝのみならず、命を海に^捨すて、身を島々に入れ給ひけるやらむ。天照大神は玉体に入りかわり給はざりけるか。八幡大菩薩の百王の誓ひはいかにとなりぬるぞ。其の上安徳天皇の御宇には、明雲座主御師となり、太上入道並びに一門^{みょううんざす}急状^{なり}を捧げて云はく「彼の興福寺を以て藤氏の氏寺と為し、春日の社を以て藤氏の氏神と為せしが如く、延暦寺を以て平氏の氏寺と号し、日吉の社を以て平氏の氏神と号す」云云。叡山には明雲座主を始めとして三千人の大衆五壇の大法を行なひ、大臣以下家々に尊勝陀羅尼・不動明王を供養し、諸寺諸山には奉幣^{ほうへい}し、大法秘法を尽くさずという事なし。

又承久の合戦の御時は天台座主慈円・仁和寺の御室・三井等の高僧等を相催^{あいまよお}し、日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行なわれ給ふ。所謂承久三年^{いわゆる}四月十九日に十五壇の法を行なはる。天台座主は一字金輪法等。五月二日は仁和寺の御室、如法愛染明王法を紫宸殿にて行なひ給ふ。又六月八日御室、守護経法を行なひ給ふ。已上四十一人の高僧十五壇の大法。此の法を行なふ事は日本に第二度なり。権大夫殿は此の事を知り給ふ事なければ御調伏^{じょうぶく}も行なひ給はず。又いかに行なひ給ふとも彼の法々彼の人々には^過すぐべからず。仏法の御力と申し、王法の威力と申し、彼は国主なり、三界の諸王守護し給ふ。此は日本国の民なり、わづかに小鬼^守ぞまぼりけん。代々の所従、重々の家人^{けにん}なり。譬へば王威^{もち}を用ひて民を^攻せめば鷹^{たか}の雉^{きし}をとり、猫のねずみ^鼠を食らひ、蛇^くがかへるをのみ、師子王の兔を殺すにてこそ有るべけれ。なにしにか、かろがるしく天神地祇^{てんじんちぎ}に

は申すべき。仏菩薩をばをどろかし奉るべき。師子王が兔をとらむに精進をすべきか。たかが鷲を食らはんにいのり有るべしや。いかにいのらずとも、大王の身として民を失はんに、大水の小火をけし、大風の小雲を巻くにてこそ有るべけれ。其の上大火に枯木を加ふるがごとく、大河に大雨を下すがごとく、王法の力に大法を行なひ合はせて、頼朝と義時との本命と元神とをば梵王と帝釈等に抜き取らせ給ふ。譬へば古酒に酔へる者のごとし、蛇の蝦の魂を奪ふがごとし。頼朝と義時との御魂・御名・御姓をばかきつけて諸尊諸神等の御足の下にふませまいらせていのりしかば、いかにもこらうべしともみへざりしに、いかにとして一年・一月も延びずして、わづかに二日・一日にはほろび給ひけるやらむ。仏法を流布の国の主とならむ人々は能く能く御案ありて、後生をも定め、御いのりも有るべきか。

而るに日蓮此の事を疑ひしゆへに、幼少の比より随分に顕密二道並びに諸宗の一切の経を、或は人にならぬ、或は我と開き見し勘へ見て候へば、故の候ひけるぞ。我が面を見る事は明鏡によるべし。国土の盛衰を計ることは仏鏡にはすぐべからず。仁王経・金光明経・最勝王経・守護経・涅槃経・法華経等の諸大乘経を開き見奉り候に、仏法に付きて国も盛へ人の寿も長く、又仏法に付きて国もほろび、人の寿も短かかるとみへて候。譬へば水は能く舟をたすけ、水は能く舟をやぶる。五穀は人をやしない、人を損ず。小波小風は大船を損ずる事かたし。大波大風には小舟やぶれやすし。王法の曲がるは小波小風のごとし。大国と大人をば失ひがたし。仏法の失あるは大風大波の小舟をやぶるがごとし。国のやぶるゝ事疑ひなし。仏記に云はく、我が滅後末代には悪法悪人の国をほろぼし仏法を失はんに失すべからず。譬へば三千大千世界の草木を薪として、須弥山をやくにやけず。劫火の時、須弥山の根より大豆計りの火出でて須弥山やかく如く、我が法も又此くの如し。悪人・外道・天魔・波旬・五通等にはやぶられず。仏のごとく六通の羅漢のごとく、三衣を皮のごとく身に紆ひ、一鉢を両眼にあてたらむ持戒の僧等と、大風の草木をなびかすがごとくなる高僧等、我が正法を失ふべし。其の時梵釈日月四天いかりをなし、其の国に大天変大地天等を発こしていさめむに、いさめられずば、其の国の内に七難ををこし、父母・兄弟・王臣・万民互ひに大怨敵となり、梟鳥が母を食らひ、破鏡が父をがいするがごとく、自国をやぶらせて、結句は他国より其の国をせめさすべしとみへて候。

今日蓮一代聖教の明鏡をもって日本国を浮かべ見候に、此の鏡に浮かんで候人々は国敵仏敵たる事疑ひなし。一代聖教の中に法華経は明鏡の中の神鏡なり。銅鏡等は人の形をば浮かぶれども、いまだ心をば浮かべず。法華経は人の形を浮かぶるのみならず心をも浮かべ給へり。心を浮かぶるのみならず先業をも未来をも鑑み給ふ事くもりなし。法華経の第七の巻を見候へば「如来の滅後に於て仏の所説の経の因縁及び次第を知り義に随つて実の如く説かん。日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」等云云。文の心は此の法華経を一字も一句も説く人は、必ず一代聖教の浅深と次第とを能く能く弁へたらむ人の説くべき事に候。譬へば曆の三百

六十日をかながうるに一日も相違せば万日俱に反逆すべし。三十一字を連ねたる一句一字も相違せば三十一字共に歌にて有るべからず。設ひ一經を讀誦すとも始め寂滅道場より終はり双林最後にいたるまで次第と浅深とに迷惑せば、其の人は我が身も五逆を作らずして無間地獄に入り、此を帰依せん檀那も阿鼻大城に墮つべし。何に況んや智人一人出現して一代聖教の浅深勝劣を弁えん時、元祖が迷惑を相伝せる諸僧等、或は国師となり或は諸家の師となりなんどせる人々、自らのきず頭はるゝ上、人にかろしめられん事をなげきて、上に拳ぐる一人の智人を、或は国主に訴へ或は万人にそしらせん。其の時守護の天神等の国をやぶらん事は、芭蕉の葉を大風のさき、小舟を大波のやぶらむがごとしと見へて候。

無量義經は始め寂滅道場より終はり般若經にいたるまでの一切經を、或は名を挙げ或は年紀を限りて未顕眞実と定めぬ。涅槃經と申すは仏最後の御物語に、初め初成道より五十年の説教の御物語、四十余年をば無量義經のごとく邪見の經と定め、法華經をば我が主君と号し給ふ。中に法華經ましまして已今当の勅宣を下し給ひしかば、多宝・十方の諸仏加判ありて各々本土にかへり給ひしを、月氏の付法蔵の二十四人は但小乗・権大乘を弘通して法華經の実義を宣へ給ふ事なし。譬へば日本国の行基菩薩と鑑真和尚との法華經の義を知り給ひて弘通なかりしがごとし。漢土の南北の十師は内にも仏法の勝劣を弁へず、外にも浅深に迷惑せり。又三論宗の吉蔵・華嚴宗の澄観・法相宗の慈恩、此等の人々は内にも迷ひ、外にも知らざりしかども、道心堅固の人々なれば名聞をすてゝ天台の義に付きにき。知らず、されば此の人々は懺悔の力に依りて生死やはなれけむ。將又謗法の罪は重く、懺悔の力は弱くして、阿闍世王・無垢論師等のごとく地獄にや墮ちにけん。

善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等の三三蔵は一切の眞言師の申すは大日如来より五代六代の人々、即身成仏の根本なり等云云。日蓮勘へて云はく、法偷みの元師なり、盗人の根本なり。此等の人々は月氏よりは日經・金剛頂經・蘇悉地經等を竝し來たる。此の經々は華嚴・般若・涅槃經等に及ばざる上、法華經に対すれば七重の下劣なり。經文に見へて赫々たり明々たり。而るを漢土に來たりて天台大師の止観等の三十卷を見て、舌をふるい心をまどわして、此に及ばずば我が經弘通しがたし、勝れたりといはんとなれば妄語眼前なり、いかんがせんと案ぜし程に、一つの深き大妄語を案じ出だし給ふ。所謂大日經の三十一品を法華經二十八品並びに無量義經に腹あわせに合はせて、三密の中の意密をば法華經に同じ、其の上に印と眞言とを加へて、法華經は略なり、大日經は広なり。已にも入れず、今にも入れず、当にもはづれぬ。法華經をかたうどとして三説の難を脱れ、結句は印と眞言とを用ひて法華經を打ち落として眞言宗を立てゝ候。譬へば三女が后と成りて三王を喪せしがごとし。法華經の流通の涅槃經の第九に、我れ滅して後惡比丘等我が正法を滅すべし、譬へば女人のごとしと記し給へるは是なり。されば善無畏三蔵は閻魔王にせめられて、鉄の縄七脈つけられて、からくして蘇りたれども、又死する時は黒皮隠々として骨其れ露ると申して無間地獄の前相其の死骨に

顯はし給ひぬ。人死して後色の黒きは地獄に墮つとは一代聖教に定むる所なり。金剛智・不空等も又此をもて知んぬべし。此の人々は改悔は有りと見へて候へども、強盛の懺悔のなかりけるか。今の真言師は又あへて知る事なし。玄宗皇帝の御代の喪ひし事も不審はれて候。

日本国は又弘法・慈覚・智証、此の謗法を習ひ伝へて自身も知ろしめさず、人は又を思思いもよらず。且くは法華宗の人々しばら 諍論じょうろん有りしかども、終には天台宗やうやく衰へて五十五代の座主明雲みょううん、人王八十一代の安徳天皇より已来は叡山一向に真言宗となりぬ。第六十一代の座主顯真けんしん権僧正は天台座主の名を得て真言宗に遷るのみならず、然る後法華真言をすて、一向謗法の法然が弟子となりぬ。承久調伏の上衆じょうぶく じょうず、慈円僧正は第六十二代並びに五・九・七十一代の四代の座主、隱岐法皇の御師なり。此等の人々は善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・慈覚・智証等の真言をば器はかわれども一の智水なり。其の上天台宗の座主の名を盗みて法華經の御領を知行して三千の頭かしらとなり、一国の法の師と仰がれて、大日經を本として七重劣くだれる真言を用ひて八重勝れりとをもへるは、天を地とをもち、民を王とあやまち、石を珠とあやまつのみならず、珠を石という人なり。教主釈尊・多宝仏・十方の諸仏の御怨敵ごおんてきたるのみならず、一切衆生の眼目を奪ひ取り、三善道の門を閉ぢ、三悪道の道を開く。梵・釈・日月・四天等の諸天善神いかでか此の人を罰せさせ給はざらむ。いかでか此の人を仰ぐ檀那をば守護し給ふべき。天照太神の内待所ないしどころも八幡大菩薩の百王守護の御ちかいも、いかでか叶はせ給ふべき。

余此の由を且つ知りしより已来、一分の慈悲に催かされて粗随分の弟子にあらあら申せし程に、次第に増長して国主まで聞こえぬ。国主は理を親とし非を敵とすべき人にてをはずべきが、いかんがしたりけん、諸人の讒言ざんげんををさめて一人の余をすて給ふ。彼の天台大師は南北の諸人あだみしかども、陳隋二代の帝、重んじ給ひしかば諸人の怨あだもうすかりき。此の伝教大師は南都七大寺讒言せしかども、桓武・平城・嵯峨の三皇用ひ給ひしかば、怨敵怨もをかしがたし。今日蓮は日本国十七万一千三十七所の諸僧等のあだするのみならず、国主用ひ給はざれば、万民あだをなす事父母の敵かたきにも超え、宿世のかたきにもすぐれたり。結句は二度の遠流、一度の頭こうべに及ぶ。彼の大莊嚴だいしょうごんの末法の四比丘並びに六百八十万億那由他の諸人が普事比丘一人をあだみしにも超え、師子音王ししおんのうの末の勝意比丘・無量の弟子等が喜根比丘をせめしにも勝れり。覺徳比丘がせめられし、不輕菩薩が杖木をかをほりしも、限りあれば此にはよもすぎじとぞをばへ候。

若し百千にも一つ日蓮法華經の行者にて候ならば、日本国の諸人後生の無間地獄むけんはしばらくをく。現身には国を失ひ他国に取られん事、彼の徽宗・欽宗のごとく優陀延王・訖利多王等のごとくならむ。又其の外は或は其の身は白癩黒癩、或は諸悪重病疑ひなかるべきか。もし其の義なくば又日蓮法華經の行者にあらじ。此の身現身には白癩黒癩等の諸悪重病を受け取り、後生には提婆・瞿伽利等のごとく無間大城に墮つべし。日月を射奉る修羅は其の矢還つて我が眼に立ち、師子王を吼ゆる狗犬は我が腹をやぶる。釈子を殺せし波琉璃王は水中の中の大火に入り、仏の御身より血を出だせし提婆達多は現

身に阿鼻あびの炎を感じ。金銅の釈尊しやくそんを焼きし守屋は四天王の矢にあたり、東大寺・興福寺を焼きし清盛入道は現身けんしんに其の身みも燃うる病をうけにき。彼等は皆大事なれども日蓮が事に合はすれば小事なり。小事すら猶なほしるしあり、大事いかでか現罰げんばつなからむ。

悦ばしい哉、経文に任せて五五百歳ごごひゃくさい広宣流布をまつ。悲しい哉、鬪とう争じょう堅固けんこの時に当たって此の国修羅道しゆらどうとなるべし。清盛入道と頼朝らいちょうとは源平両家、本より狗犬えんこうと猿猴えんこうのごとし。小人小福の頼朝をあだみしゆへに、宿敵しゆくてきたる入道の一門はほろびし上、科とがなき主上の西海せいかいに沈み給ひし事は不便ふびんの事なり。此は教主釈尊・多宝・十方の仏の御使ごしひとして世間には一分とがの失しなき者を、一国の諸人しよじんにあだますのみならず、両度の流罪に当て、日中に鎌倉の小路をわたす事朝敵のごとし。其の外小庵には釈尊を本尊とし一切経を安置したりし其の室むろをは毀ねこぼちて、仏像・経巻を諸人しよじんに踏ふますのみならず、糞泥ふんでいにふみ入れ、日蓮が懷中に法華経を入れまいらせて候ひしをとりいだして頭をさんざんに打ちさいなむ。此の事如何なる宿意もなし、当座の科もなし、たゞ法華経を弘通する計りの大科なり。

日蓮天にちれんてんに向かひ声をあげて申さく、法華経の序品ほんしやくを拜見し奉れば、梵釈ぼんしやくと日月と四天と竜王りゆうおうと阿修羅あしゆらと二界八番の衆と無量の国土の諸神しよしんと集しゆうえ会し給ひたりし時いこんどう、已今いこんどう当に第一の説を聞きし時、我とも雪山童子せつせんの如く身を供養し、薬王菩薩やくわうぼさつの如く臂をもやかんとをもいしに、教主釈尊、多宝・十方の諸仏の御前ごぜんにして「今仏前に於て自ら誓言を説け」と諫かんぎょう曉しやうし給ひしかば、幸あきひに順風を得て「世尊みことの勅つぶさの如く当に具つに奉行すべし」と二処にしよさん三會ねの衆一同おんじょうに大音声おんじやうを放ちて誓ひ給ひしはいかんが有るべき。唯仏前ごぜんにては是くの如く申して多宝・十方の諸仏は本土にかへり給ふ。釈尊は御入滅ごにりめつならせ給ひてほど久しくなりぬれば、末代辺国まくだいへんこくに法華経の行者有りと、梵釈・日月等御誓ひをうちわすれて守護し給ふ事なくば、日蓮がためには一旦いつたんのなげきなり。無始むし已来鷹いこんどうの前の雉きじ、蛇へびの前の蛙かへる、猫ねこの前の鼠ねずみ、犬いぬの前の猿さると有りし時もありき。ゆめの代よめなれば仏菩薩・諸天しよてんにすかされまいらせたりける者にてこそ候わめ。なによりもなげかしき事は、梵ぼんと帝ていと日月と四天等しよてんの、南無妙法蓮華経なんぶみょうほつれんげの法華経ほつれんげの行者の大難おほがたに値あふをすてさせ給ひて、現身けんしんに天の果報も尽きて、花の大風おほかぜに散るがごとく雨の空より下るごとく「其の人命みようじゆう終しゆうして阿鼻獄あびじやくに入らん」と無間大城むかんたいていに墮おち給はん事こそあわれにはをぼへ候へ。設たひ彼の人々三世十方さんぜじふぱうの諸仏しよぶつをかたうどとして知らぬよしのべ申し給ふとも、日蓮は其の人々には強たきかたきなり。若し仏のへんへんぱぱをはせずば梵釈・日月・四天をば無間大城むかんたいていには必ずつけたてまつるべし。日蓮が眼まなこととをそろしくば、いそぎいそぎ仏前ぶつぜんの誓ひをはたし給へ。日蓮が口